

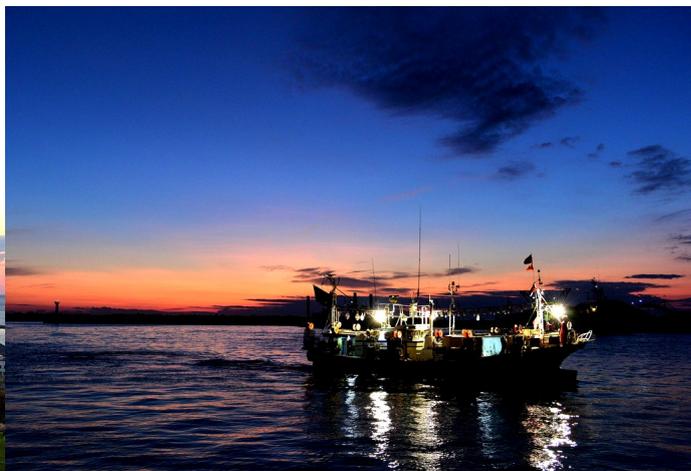
マルセイニュース 10月号

発行日 2017/10/21

株式会社 マルセイ

浦河町東町うしお1丁目

〒057-0005 TEL0146-22-5123



風景写真提供 断内カメラ愛好家さんと浦河観光協会中川真さん

美しい彩りの秋を迎えましたね

昨年に比べても不漁と聞こえてくる今年の定置鮭漁とイカ漁。他の魚の水揚げも少なく、残念ながら今年の秋は浦河港もわたしたちの食卓もちょっとさみしいです。「いただきま〜す！」と自然からの恵みを、いつも当たり前のようにいただいてきましたが改めて感謝したいですね。

9月24日に開催された「浦河産業まつり」では、地元の美味しい秋の味覚がたくさん販売されるとあって今年も大賑わいでした。復活から3年。今年は新しい試みも楽しめました^^



産業まつりに2,500人！

役場の前にこんなにたくさん人が集まるのは「産業まつり」ならではでしょうか。今年は初めてハンドメイドの小物やこども服におもちゃなどを販売するフリーマーケットや楽しそうなワークショップもありましたね。浦河高校3年生が浦河産いちごのすずあかねを使って商品開発したパウンドケーキ「ウラバウ」も大人気！あっという間に完売していました。午前販売分の最後の1個をゲット！おいしくいただきました^^ (マックス)





少し遅れましたが…

例年どおり「新年度の計画」を立ててきます！

9月21日から当社の新年度41期がスタートしています。毎年、新年度が始まる前に実施している社長と経営コンサルタントとの「経営合宿」ですが、今年はこれからです。今期は社長が還暦を迎える節目の年を迎えます。会長の死去および赤字決算という結果を受けて、15回目の経営合宿ではしっかりと経営計画を練り、改めてこれからの経営に取り組みたいと思います。



先日、「逆転人生」という借金40億円を返済した人の実話の紹介をテレビで見ましたが、泣けました。何度も泣きました。

健全な財務体質の会社にするところから取り組んできました

当社も、私が社長になった時には借金がありました。ですから先ず大きな目標のひとつが、「健全な財務体質の会社にする」ということでした。同時に掲げた目標が、「独自のサービスを提供できる会社を作ろう」と、「お客様との信頼関係のある会社になる」と。この3つの目標に向かって、みんなで頑張ってきました。

これらの目標達成のためにと、わかりやすい標語も作りました。「楽しく仕事のできる会社しよう」はその一つです。「安かろう、悪かろうは止めよう」「大きな努力で小さな成果を上げよう」と、価格競争で仕事を奪うのではなく、自分たちの仕事に誇りを持つような会社を目指しています。

「ガスも灯油もクリーン事業もメンテナンスも増やそう！」という目標も立てましたが、残念ながらその達成はなかなか難しいです。(笑)でも、長い取引のお客様さまは勿論ですが、「マルセイさん」と新規で当社のご指名をいただき、ご利用してくださるお客様がいらっしやることに感謝しています。ありがとうございます！

これからも小さな燃料店が奮闘する日々をお伝えしていきます

マルセイは、社長である私自身を含め、正社員は5人だけの小さな会社です。若者たちの成長と共に、仕事の実力が向上するのも楽しみです。「すぐに着手できる会社になる」という目標の達成も夢ではなくなりました。「減らしていいのは体重だけ！」という標語もありましたね。どうやらこの標語だけはいつまでも当社必須の標語のようです。(笑)

今期もマルセイをどうぞよろしくお願いします。

社長



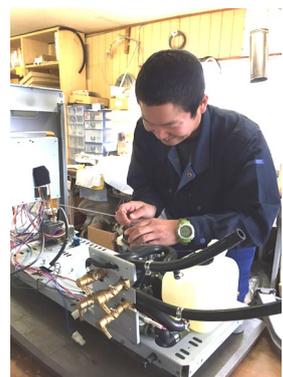
ご予約いただいた『ストーブ分解整備』も終盤 冬の繁忙期を控えて、みんな頑張っています！

先月号で、当社会長・小山蔚(しげる)の訃報と故人との想いなどを伝えるお伝えさせていただきました。心温まるメッセージを寄せただき、あらためてお心遣いに感謝申し上げます。ありがとうございます。

ここ数年は温かい秋のスタートでしたが、今年は寒くなるのが少し早いような気がします。会社の環境整備も木柵のペンキ塗りが残っていますが、冬が来る前に終わるのは今年はずいぶん難しいかな？直したはずの雨漏りも残念なこと、また復活！こちらも対処しなくては…。

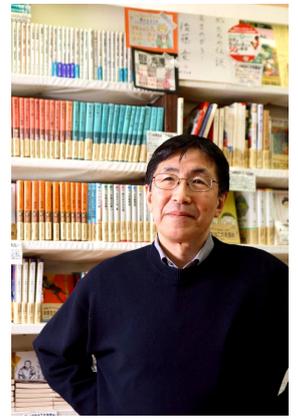
「夏季の間に済ませておきましょう。」とおすすめてご予約をいただいていたタンク洗浄やタンク交換、ストーブ分解整備などの各種メンテナンスも、まもなく終了します。おっと、自宅のストーブの分解整備がまだでしたね、社長。寒さが本番になる前に、どうかこちらもよろしくお願いします！(笑)

さて、今年の冬もマルセイが配送する灯油で暖かくお過ごし下さい！





「六畳書房」を応援してくれた 久住邦晴さんが逝去されました 久住さん、浦河の応援ありがとうございました！



まさに本屋があったらいいと実現の可能性を探っていたとき、生涯を「本屋のおやじ」として生きた久住邦晴さんが真剣に相談ののってくれました。その時にご提案いただいたのが「続けることが目的の本屋」です。2014年11月25日、浦河にまちの本屋『六畳書房』が誕生。その後、残念ながらすみ書房さんは倒産となり心強いバックアップをなくしてしまいましたが、現在、『六畳書房』は仕入れ先に困窮しながらも今後を模索しているようです。懸命に“本屋”の仕事に取り組んだ「本屋のおやじ」に応援していただけてきた財産を大切にできたらと思います。



千円の参加料にも関わらず、50名定員のところ70余名の参加者がありました。休憩の時間が惜しかったという声も聞かされたほど、あっという間に時間が過ぎた講演会でした。

2014年2月3日。文化会館で、「久住社長、浦河に本屋を作るって可能ですか？」というタイトルで開催された『そうだ、本屋のおやじを呼ぼう。講演会』は、当時、浦河町地域おこし協力隊だった武藤拓也さん（現在・六畳書房店番）の企画による講演会でした。

反響の大きかった くすみさんの講演会

当社会長の葬儀がひと段落した日、SNS（ネット上）でくすみ書房社長だった久住さんの訃報を知りました。とてもショックでした。

元くすみ書房代表取締役社長久住邦晴が、肺がんのため満66歳にて逝去いたしました。2015年6月にくすみ書房が倒産となつてしまい、たくさんの方々に迷惑をおかけ致したことをずっと気に病んでおり、これから恩返しをするべく準備と構想を始めた矢先に病気が発覚いたしました。以来、懸命に闘病を続けておりましたが、思い叶わず、去る8月28日18時29分、逝去いたしました。ここに生前のご厚情を感謝し謹んでお知らせ申し上げます。



こんな写真を発見！『出張くすみ書房』で本を選んでいる男性は、なんと、マルセイの亡き会長です。

「わたしは、本には奇跡を起こす力があると思つて居るんです。」と話された久住社長は、「浦河に本屋を作るって可能ですか？」との問いかけに「はい、できます。但し、いくつかの工夫と条件、そして発想の転換が必要で、利益を求める商売としてではなく、『浦河に本屋がある』ことを価値とし、目的としてはどうか。」と提案。「人が集まる『コミュニティ本屋』という新しい発想の本屋で、浦河の子どもたちに上質な本を提供していきたい、町民が自慢できるような本屋を目指して欲しいと願います。」と話されました。そして六畳書房が誕生したときは本当に喜んで下さいましたね。

浦河に本屋があることを 価値とし、目的とし 町民が自慢できる本屋を 目指して欲しい

「日本一あきらめの悪い本屋といわれております。」と会場を温かい笑いの渦に巻き込みながら、きびしい経営危機の難局を何度も乗り越えて街の本屋さんを続けていた久住さんのお話にて、参加者のみなさんは強い感銘を受けていらつしやいました。

ただただ「本屋のおやじ」として、純粹な喜びを感じていらつしやつたのでしょうか。報償などなくとも、その後も何度も浦河に足を運んでくれた久住さんでした。浦河駅舎を会場に開催された『うららべつふえすた』には、『出張くすみ書房』として出店。ご本人が驚くほどたくさんのお本が売れて、本当に喜んでいらつしやいました。他にも楽しそうに本を売っていた姿が思い出されます。MIOで開催された本のフリーマーケット『浦河ワンデイブックス』での、絵本を紹介していた笑顔も忘れられません。



2014年11月9日。一口店長有志で札幌のくすみ書房さんに選書に出かけた時の写真です。心から小さな町にできた本屋を応援してくださいました。

資金力のない六畳書房の棚が月替わりで豊かな表情を持つ棚にできていたのも、くすみ書房さんの書籍を仕入れさせて頂けていたからでした。残念ながら2年前にくすみ書房さんは倒産。その後間もなく大病が発覚し、病氣と懸命に闘いながらも「本屋のおやじ」は最後まで新たな本屋の構想を練りながら、わたし達の町の本屋にも心を配って下さいました。

みんなの六畳書房を 続けて行けますように

「本屋のおやじ」はいつも本のことしか頭に無かつた。でも、とにかく「本」を大切にしたい本屋としての仕事をあんなに頑張つても…とうとう倒産してしまいました。その上、大病で命まで亡くされてしまったことは残念でなりません。「本屋のおやじ」として生きた久住さんありがとうございました。



くすみ書房にて、六畳書房店番と一緒に本当にうれしそうな笑顔。

「六畳書房」が開店してから間もなく3年を迎えます。横浜在住で六畳書房の一口店長でもある友人から、問い合わせがありました。「書店ゼロ自治体が増える中であつて、六畳書房は貴重な存在です。存続しつづけているのでしょうか。」
みんなでつくれた浦河の小さな本屋は、本が売れて出た利益を使つて次の本を増やして並べて行く仕組みで続けられます。寄り添い、学び、育つ「みんなの学校」の映画を見て、講演でのお話も聞きまして、久住さんに応援していただいたみんなの本屋についても、今一度応援したいと思ひました。
マックス



みんなの学校 木村泰子氏 講演会

「みんながつくる みんなの学校
～いつもいっしょがあたりまえ～」

日時：10月9日(月・祝) 17:00～
場所：浦河町文化会館 ふれあいホール
主催：ぼっかぼかの会、日高地方精神保健協会
後援：浦河町、浦河町教育委員会



映画「みんなの学校」の大黒座での上映に併せて講演会が開催されました。講演終了予定時間を30分以上過ぎたのを知って「あら、こんな時間!」と慌てていた木村さんでしたが、満員の会場にいた皆さんは少しでも長く木村さんのお話を聞いていたいと思う人ばかりだったのではないのでしょうか。お話を聞きながら、「学校」に限らず、みんなで作る「みんなの…」について色々と考えさせられた講演会でした。この映画を観ることができたのはもちろん、木村さんご本人のお話をお聞きするチャンスをいただき、主催者の皆さんにお礼を言いたいです。ありがとうございました!

この度はたくさんのご来場、ありがとうございます。

十月九日、大阪市の大空小学校の初代校長先生でいらした木村泰子氏をお招きしての講演会を開催いたしました。予約不要であったため、「どのくらいの方が来て下さるのだろうか」と事務局側は不安でいっぱいでしたが、時間が近づくにつれて大勢の方々が会場に集まって来て下さいました。

講師の木村先生は映画に出演されているそのままの方で、「どんな子もみんなと一緒にいるからこそ学べる」という信念を強く感じさせる方でした。障害のあるなし、家庭環境の違い、学力や運動能力の違い、その「違い」を認め合う事の大切さをつくづく考えさせられるお話でした。

木村先生がおっしゃっていた『その町に住む子なら、誰でも通える学校』は子供も先生も保護者も地域も一緒になって作り上げていかななくてはならないものだと思います。多くの大人の優しい眼差しで子供達がスクスク育って行ってくれたら、その子供達は「違い」を認められる大人となり、お互いを認め、自分が子供の時にしてもらったと同じ様にその時代の子供達に関わって行ってくれるのではないかと考えています。この講演が多くの方々の心にしっかり残ってくれた事を願います。

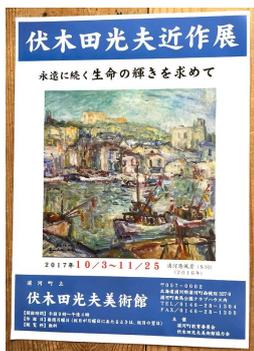


「今年も早や晩秋を迎えました。ふり返ると季節はなんと豊かな光りと風を僕達に贈ってくれることか! 僕も82歳になると、その一年一年の早さと一緒にその豊饒さに驚いています。死が少しずつ近づいているのでしよう。一日一日が輝いて見えるのは老いの良いところですよ。(中略)

僕はあまり変わったものは描かないようになりまして。ごくあたり前のものが実は、びつくりするほど美しいと思うからです。(中略)

僕は浦河に生まれたことを、いつもありがたく思っています。芸術家になって、自分の内面を訪ねると、少年時代の食べるものもなかった戦争真っ中の浦河の思い出が、泉のように豊かに湧き出て参ります。それが僕の芸術の原点なのでしょう。再会を楽しみにしています。」

浦河町生まれの画家『伏木田光夫近作展』の案内の、ご本人からの「言葉の贈り物」の中の一文です。



伏木田光夫近作展 永遠に続く 生命の輝きを求めて

浦河町立 伏木田光夫美術館 (浦河町西幌別327-9) 10月3日(火)～11月25日(土)まで



浦河港風景(2016年)

最近いただいたおハガキには、「絵を描く仕事をやっていくとだんだん少年になって行くようです。」と書かれていました。昨年、偶然、浦河港でこの絵を描いていた伏木田さんに久しぶりに出会うてからは毎月、マルセイニユースを郵送させていただいています。

82歳の画家からの贈り物によると、老いと共に与えられるのは決して辛さや悲しみばかりではないようです。私もこんな風に、当たり前のものが美しい、季節の光や風や、時が過ぎゆくことが豊穣に感じられる、そんな自分で生きていきたいなあと思います。

「永遠に続く、命の輝きを求めて」。どうぞ、浦河町立『伏木田光夫美術館』に足を運んでみて下さい。

マックス



最近読



「小商い」で自由に暮らす 房総いすみのDIYな働き方

磯木 淳寛 (1977) 著 イカロス出版発行

買い手や売り手を限定するということは、つまりは人間関係のデザインである。ネット販売まで手広く行った方が、売上をもっと増やせる可能性は高い。それをあえてせず、小さな経済圏で商いを成り立たせているのは、そうすることでしか得られないものがあるからだ。ネットを使った「どこでもできる」商いよりも、対面販売を主とするからこそお客さんや仲間との結びつきが強く、だからこそ経済的にも自立しているのだ。(本文より)

久しぶりに衝撃を受けた本でした。さして期待もしないで手に取ったのです。ニユース読者の方からのお勧めもあり、「小商い」というキーワードに惹かれて読み始めたのですが、その内容に驚きました。といつても、何かスゴい商売の秘訣やとんでもない実績を残している人物が描かれているわけではありません。むしろ紹介されている店主の大半は、ささやかな

ゆるやかな結びつきで 自分たちの経済圏を 生み出す若者たち

な商いをして暮らす人たちがばかり。わたしが衝撃を受けたのは、なんとなく知っているような気になつていた「小商いで暮らす若者たち」のことを、自分が何にも知らないことに気づかされたからです。はつきり言う、わたしはイベントやフリーマーケットなどを販売の主戦場としている彼らのことを、見くびっていました。株式会社社長の社長の方が大変だしエ

ラインだぜ……。どこかにそんな気持ちがあつたと思います。そんな慢心を打ち砕いてくれた。そして思いました。時代の大きな変化に感づいていない。やっぱり自分も年相応に老いているなあ、と。

千葉県の東側、三つの市町を合わせて人口十万人ちよつとの地域を、著者の磯木さんは「房総いすみ地区」と名付けました。ここに、ものづくりを中心として小商いをする若者たちがいつのまにか増えてきて、各地で頻繁に立つフリーマーケット(つまりは「市」いちです)を主軸として商いを営み、そこで新たな顧客と仲間を



本の中で紹介されているおにぎり工場の坂本さんとアクセサリ作家の小畑さん。お二人とも、いすみ地域への移住者です。

獲得し、ゆるやかなレム(領域とか共同体という意味)に似た経済圏を生み出していることに気づきます。野菜などの食料品や工芸品、チーズ工房、スウィーツ屋、三輪車でカフェを開く人などかなり多彩な仕事をしています。鳥取県智頭町に移転してしまつたパン屋タルマーリーも最初はここで、パン屋を始めました。タルマーリー夫妻が、この地域が小商いで賑わうことになる大きな力であつたことも、本書を読むとよくわかります。

彼らの多くは、店舗を持つっていません。なので固定費がとて低いです。店舗じゃないので、いつ売るか自由です。なかにはチーズ工房のように月に一回しか店を開けないなんてところもあります。ちなみにこの一日には、日本中からお客が集まります。まさに本書のタイトルどおり、小商いで「自由」に暮らすです。ネット販売に積極的ではないことにも、わたしは驚かされました。「若い人たちの小商いなんて、どうせネットで

チョチョツと売らなうらうら」という先入観があつたので、もう本当に反省しきりです。顔が見える範囲でいいに売りたい、と考えている人がほとんどです。私のような50過ぎたオヤジの若者観をあつさり裏切つて、彼らはまっとうな商いを追求しています。

顔が見える範囲で いいに売って まっとうな商いを追求

さて、わたしがもつとも驚かさず、反省させられたことを記します。なぜ彼ら若者たちは房総いすみという田舎に移り住んできたか。「そりゃあ田舎でのんびり悠々自適で暮らすためでしょう。若年寄りたく、」と読み始める前は思っていました。みなさんも同じように想像しますか?その真逆なんです。引用しましょう。

タルマーリー夫妻はインタビュ中に何度も「がむしゃら」という言葉を口にした。(話を聞いた人た

ちで)「100%やりたいことをやる」「100%納得のいくものをつくる」と言った人も多かった。彼らの目的は、のんびりした田舎暮らしではなく、納得のいくモノをつくり、それを売って生きるという充実感を得ること。だから愚直なまでに、やりたいことに打ち込んでいる。(本文より)



固定費を抑えるのも、月の営業日が必要な日数に留めるのも、ネットで売らないのも、のんびり暮らしたいからではありませんでした。納得のいく仕事をするための時間を生み出すためなのです。

良い仕事をした 田舎に移住した若者たち

著者は取材するうち、彼らのほとんどがいわゆる趣味を持つていないことに気づきます。そんな時間はないんですよ。営業日が少ないので当然収入は多くありません。それでも良いものをつくりたい。良い仕事をした。そして顔が見える範囲で商いしたい。それこそが、著者が田舎に移住してきた若者たちの小商いの姿に見出したものでした。わたしの慢心を教えてくれた1冊でした。

社長



レタスとマヨソースの相性も抜群でした！



ガスを使っておいしくクッキング

みんな大好き！「エビマヨ」

中華料理の中でも人気の「エビマヨ」が油で揚げずにフライパンで揚げ焼きするだけで簡単にできました。後かたづけも簡単！お弁当のおかずにもいいですね～。レタスをたっぷり敷いて一緒に食べましょう♪ 粒マスタードが効いたマヨソースが美味しい！



●材料（4人数分）

- ・ エビ 12尾～16尾
- ・ 酒 大さじ2
- ・ 塩 1つまみ
- ・ 片栗粉 大さじ4
- ・ サラダ油 大さじ3～4

- ・ 塩 適量
- ・ レタス(細切り) 適量

* マヨソース

長ネギ 1本+[A]



すぐに使える
便利なむきエビを
利用しました。

- [A]
- おろしにんにく 1/2かけ分
 - 牛乳 大さじ3
 - マヨネーズ 大さじ2
 - オイスターソース 大さじ1/2
 - ごま油 大さじ1/2
 - 粒マスタード 小さじ2
 - 砂糖 小さじ1～1と1/2

●作り方（2012年エッセ1月号 ケンタロウのおかずBOOK 参照）

- 1、マヨソースをつくる。長ネギはみじん切りにしてボウルに入れ、【A】を加えてよく混ぜる。
- 2、殻むきして背ワタを取ったエビを洗って水気をふく。ボウルに入れて酒、塩、片栗粉の順に加えてまぶす。
- 3、フライパンにサラダ油をひきエビを入れてしっかり焼く。全体に焼き目が付いたら1を加えてあえる。塩で味を整え、器にレタスを敷いて盛り付けたら完成！



「エビマヨ うれしいー！」

マックスさん、(また)太りました？ 買い物をしていると声をかけられました。先月の試食風景の写真を見てそう思われたとか。いやいやいや、プラスにはならずには何とか横ばいを保っていますよ～。フフフ。着ていた服にもよりますが、実は写真を撮る時の位置も重要なようです。しっかり者のばわふるは、決まって一番奥の席を確保。ちゃーんと考えているんですねー。ふーん…、そうかそういうことか。何も考えないで生きているマックスだけど、社長、今度からは愛する妻のことを少し考えて席を選びましょうか。ね～^^

🍴 今月も“使えるレシピ”です♪

試食した人	今日の料理は★いくつ？(最高得点 ★3個)
社長 (2.7)	★★★ 普通にうまい！けど、おれのはソースが少ないなあ～。その分、減点かなー。
ユートライン 古森くん (3.0)	★★★ いや、エビマヨ美味いっすね～^^
ばわふる (2.8)	★★★ う～ん。ずっと食べたかったエビマヨだからそのイメージとはちょっとね。でも、おいしかった！
恭平くん (3.0)	★★★ ごはんが進みますよねー。(と、お代わり！)
圭祐くん (2.8)	★★★ もう少しマヨソースが絡んだ方がおいしいかも。
マックス (2.5)	★★★ もう少し絡むソースに仕上げたかったなあ。ちと牛乳を多く入れ過ぎてしまったかなー…



季節は秋。この日は大根おろしを入れたぼりぼり(きのこ)のみそ汁でした。オール3ではなかったけれど、付け合わせのおかずもみんな完食。ご馳走様、おいしかったね～のその後に「社長、次はもっと大きいエビのプリプリの『エビマヨ』が食べたいです！」と言っていたのは、さて誰でしょうか^^



恐るべし！マルセイの調理男子圭祐くん！食べた直後のコメントでマヨソースの絡みについて遠慮がちにもう少し・と言っていましたね。そうなんです。私も牛乳の入れ過ぎかなあ～なんて思っていましたね。しかし！編集集中に大きなミス発見！作り方の2、を全く飛ばしてしまいましたね。片栗粉を使っていないでとろみなし！そりゃあ絡みませんよね。へ～



竹輪マヨ！翌日のお昼に、多めに作り過ぎていた「マヨソース」を使って作ってみました。いけます！でも、竹輪の味が付いている分ソースの味付けは薄めにどうぞ♪

社長のちょっと長いコラム

ホテルで思うこと

一年に何回か所用で札幌に行くことがあります。仕事以外に夫婦で出かけることも、幾度かあります。ほとんどは一泊の旅行なので、ホテルに泊まります。とくに決まった宿はないので、その都度どこかのビジネスホテルに泊まることになるのですが、ここ数年はほんとうに外国人観光客の宿泊者が増えました。増えた、という表現だけでは正確ではありませんね。時としては、宿泊客の大半が外国人旅行者ということも珍しくありません。

仕事柄頻繁に出張している方なら、私などよりよくこの辺の事情はご存じでしょう。6月に妻と東京で二泊したホテルなどは、ついに「日本の一人も会わなかったね」と話したほどです。このような現状を、わたしはどう思っているのか。正直に告白してみます。



うれいのですね。異国からの旅人がこんなにいる、とワ

クワクします。みんな日本を楽しんで、またこの国に来たいなあと思っています。もちろん京都やベネチアなどの観光地では、観光客の多さが日常生活に支障が出るほどになり、問題となっていることも知っています。けれどこれらの観光都市が、観光客なんか要らない！とけつして考えていないことも明らかです。大事な税源ですから。

中国や韓国の観光客は賑やかでマナーが悪いから勘弁して、と思っている方も少なくない数いると思います。これも正直に告白してみましよう。うるさいのは苦手です。舌打ちしたくなることがなかったかとさえ、ありません。そんなとき、いつもこう考えました。戦後の日本が豊かになりバブル期へとむかっているころ、日本人観光客が欧米でどう評価されていたかを思い出そう、と。パリやミラノの一流ホテルの廊下をステテコ一丁で歩くとか、日本で甘やかされて

いることが世界でも通用すると思つて、酔つて女性に狼藉をはたらいたとかいう逸話がたくさんあったじゃないかと。札幌の狸小路を団体でにぎやかに歩いているアジアの人たちを見かけると、自分をいましめて思います。「この人たちはたぶん、俺と同じく身体を使っ

て稼いでいる労働者。海外旅行がうれしくて何が悪い。」この事情も急速に変わりつつあります。個人旅行者が目立つように思います。6月に泊まった東京のホテルでもアジア系の人たちをたくさん見かけたのですが、一人ないし二人連れの人が大半でした。みんな静かでマナーも申し分ない。それどころかみんな英語で話すし、身なりもあきらかにわたしより上品(笑)。いやな思いなどしませんでしたよ。

むしろ、晩ご飯を食べた新橋駅近くの中華料理店で、酔っ払つて部下にお前の好きなAV女優を言ってみると強要し、中国人オナーが残つている小籠包を包みましようかという、「冷めてるからいらねえ」と言い放つた中年オヤジや、帰りの飛行機の中でいったい誰に聞かせるつもりなのか大声で自分のデカイ営業実績(本当かどうかは不明)を延々と若者に話していた熟年オヤジの方が、よっぽどマナーが悪くて不愉快でした。

世の中にはいろんな人がいます。その「いろんな」部分を、特定の国籍に原因を求めるのは事実としてまちがいですし、民族や出自で人を判断する世の中に逆戻りしてはいけません。そんなことを最近思っています。

さのばわふる日記



先日、お隣の町の某果樹園の奥様から『葡萄狩りの嬉しいお知れ』の嬉しいお知らせが入り、会社のおみんなを連れて行くつもりです。それではマルセイの慰安旅行にしよう♪と社長夫婦の居ぬ間にレッツゴー♪

一時間ほど早目に会社を閉めて、四人で隣町へ三十分弱のドライブ。私は初めての葡萄狩りなので収穫した時のカゴはどんなのがいいのかと、小さいダンボールと重い物カゴを人数分用意。ハウスに到着してカゴを取り出すと、「そんな大きいカゴを持ってきて人間性が分かるね」と奥様に笑われ、「いやいや、だから控え目に小さい箱も用意してきましたよ」と言うと、「全部、用意してありますから」と収穫セットまで完備されていました。

実はここ、果樹園ではなく地域の子供たちに食材について感心を持ってもらおうと始められ保育所や小学校の子供たちに毎年開放しているそうです。

葡萄を食べながらの収穫。甘くて美味しい♪箱にはたくさんさんの葡萄が入って、お持ち帰り。さらに素敵なお庭も見学。今日は、「マルセイの慰安旅行なの♪」と言うと「あら、安い旅行だね」と言われましたが、はい！一切料金はかかっておりません。お誘いいただいたことに感謝です。

とっても楽しかったです♪ありがとうございます。去年は栗拾い、今年も葡萄狩りと実りの秋を楽しませてもらっています。天高くばわふる肥ゆる秋ですが、浦河の秋は寒いく。でも食べ物は美味しい♪



発行 株式会社 マルセイ
灯油・プロパンガス販売・機器修理
廃棄物収集運搬・暮らしのサポート事業
冬季期間 (10月~3月) 定休日: 日曜・祝祭日 営業時間 8:30~6:00 土曜3:00



編集 おはなし家(マックス) 発行部数 3500部
【Emailアドレス】 marusei.gs@gmail.com
【マルセイブログ】 「マルセイブログ」で検索してください
〒057-0005 浦河町東町うしお1丁目9-3
TEL 0146-22-5123